

ベトナム戦争の時代を生きた台湾人日本兵 —中村輝夫と荘百洋—

林 英一

はじめに

1. 三つの名をもつ男
 2. ベトナム戦争の時代
 3. ベトミンとともに戦わなかった日本兵
 4. ベトナム戦争を知る男
 5. 難民
- おわりに

キーワード：台湾、ベトナム戦争、残留日本兵

はじめに

本稿の目的は、アジア・太平洋戦争後に現地に残留した台湾人日本兵であった中村輝夫と荘百洋という二人の人物の軌跡を通じて、ベトナム戦争の時代の記憶を、従来の国民史や国家中心の冷戦史とは異なる視点で描き出すことにある。

彼ら「残留日本兵」に関する従来の研究は、1972年にグアム島で発見された横井庄一、74年にフィリピン・ルバング島で発見された小野田寛郎、同年にインドネシア・モロタイ島で発見された中村輝夫を象徴的事例として、1950年代から70年代半ばにかけての日本社会の戦争の記憶を解明することに力点を置いてきた。たとえばベアトリス・トラファルトは、残留日本兵の

日本社会への帰還が日本人に衝撃を与え、復員軍人や戦争遺族に対する態度、さらには戦争の記憶の変化にいかなる影響をもたらしたのかを探究した¹。また五十嵐恵邦は、残留日本兵をシベリア抑留者ら「遅れて帰りし者」として捉え、帰還者たちの小さな歴史と、戦後日本がつむぎ直した大きな物語とのあいだの緊張関係を描いている²。

あるいは、戦前日本のアジア主義、1940年代から50年代を中心とするアジアの脱植民地化という主題のなかでの残留日本兵の役割が論じられてきた³。

これに対して本稿は、1970年代半ばに横井庄一、小野田寛郎、中村輝夫の「発見」を起点とし、同時代におけるアジアの戦争や開発の記憶の諸相を描こうと試みているという意味で、従来の研究とは一線を画す。

その背景にあるのは、高度成長期への関心の高まりである。近年の日本近現代史研究では、1950年代前半までの日本社会は多くの点で戦前と連続しており、むしろ高度成長期にこそ大きな断絶が生じた、との見方がとられることが多い。また、高度成長期以後に生まれた世代へと世代交代が進むなかで、格差問題の台頭などによっ

¹ Beatrice Trefalt. *Japanese Army Stragglers and Memories of the War in Japan, 1950-1975*. London: RoutledgeCurzon, 2003.

² 五十嵐恵邦『敗戦と戦後のあいだで一遅れて帰りし者たち—』筑摩選書、2012年。

³ 後藤乾一『火の海の墓標』時事通信社、1977年。クリ

ストファー・E・ゴシャ、立川京一共著「ベトミンとともに戦った日本人」『軍事史学』第36巻、軍事史学会、2001年3月、218-232頁。立川京一「インドシナ残留日本兵の研究」防衛庁防衛研究所『戦史研究年報』第5号、2002年3月、43-58頁。林英一『残留日本兵の真実』作品社、2007年。

て、高度成長期に新たな関心が向けられている。

そこで本稿では、1970年代半ばを歴史の転換点と捉え、残留兵たちの生き様と同時代史に焦点を当てることで、日本の高度成長とその陰で発生していたアジアの戦争と開発の記憶を示すことを目指したい。

1. 三つの名をもつ男

東インドネシアの北端に浮かぶモロタイは、第二次世界大戦中、日本軍と米軍との間で激戦が繰り広げられた島である。

2012年9月、敗戦時に日本陸軍第二軍司令官と連合軍との間で降伏文書調印式が行われた県都ダルバで、インドネシア政府主催の記念行事が開催された。ユドヨノ大統領や駐インドネシア日本大使が来島し、オーストラリアを中心に世界中からヨット愛好家が集まったが、そのなかには激戦を生き延びた米豪の退役軍人もいた。

これにあわせて、島では第二次世界大戦博物館、沖合に浮かぶズムズム島のマッカーサー將軍碑と並んで、県政府によって、一体の像が建立された⁴。

像の主は、かつてこの島のジャングルに30年間にわたり潜伏していた残留日本兵の「中村輝夫」。「中村輝夫」というのは日本名で、台湾の先住民名はスニヨン（史尼育唔）、後年は中国名の李光輝（リクワンホエ）を名乗った人物である。以下の中村に関する記述は、河崎の著作⁵と佐藤の著作⁶に基づく。

彼は、1919年10月8日、台湾台東県成功鎮信義里郡都歴村に生まれた「高砂族」⁷だった。

およそ500年前、台湾島全域は南島語族の居

住地であった。彼ら先住民がいつ、どのような経路で台湾島に移住してきたかは未だ謎であるが、プロト・マレー文化を保持し、オーストロネシア語族の言語を話す彼らは、いまでも東南アジア島嶼部やオセアニア地域の南島文化圏に属している。それが1683年に清王朝の領土に編入されると、200年の間に中国大陆から漢族が続々と渡り、日本統治期には約300万人にまで増加した。こうして漢族文化圏が拡大すると、約30万人の南島語族は、少数民族へと転落し、平地に暮らし、漢族と同化していった先住民は「熟蕃」、漢族によって山岳地帯や孤島の僻地に隔離されて暮らしした先住民は「生蕃」と呼ばれた。日本植民地統治下、台湾総督府は台湾住民を内地人、本島人（漢族系住民）、高砂族（初期は蕃人）と呼称した。これに対して台湾人側は一貫して「台湾人」と自称した⁸。

中村は、22歳のとき、台湾ではじまった陸軍特別志願兵制度に血書して応募。1943年に出征し、翌年、陸軍歩兵第211連隊第二遊撃隊に所属する歩兵一等兵としてモロタイ島に渡った。

1944年9月、島は米艦隊に取り囲まれ、砲撃を受ける。さらに上陸してきた米兵から激しい銃撃を浴びた。当初500人いた高砂義勇兵は、45年12月までの間に172人まで減じていた。

中村は、米軍上陸後に残留。その経緯については諸説ある。少なくとも数年は9人ほどのグループで行動していたとされ、山中で出会った同郷の戦友から日本の降伏を知らされていたとの話もある。しかし結局一人になり、30年にわたりジャングルに潜伏。年に一、二回地元住民から農作物の種、少量の食糧と煙草をもらっていたという⁹。

⁴ The Jakarta Post. 2012年9月21日。

⁵ 河崎眞澄『還ってきた台湾人日本兵』文春新書、2003年。

⁶ 佐藤愛子『スニヨンの一生』文藝春秋、1984年。

⁷ 東部の平地に近い地域に住むアミ族のこと。

⁸ 何義麟『台湾現代史一二・二八事件をめぐる歴史の再

記憶一』平凡社、2014年、第1章。

⁹ 本人曰く現地人の畑から盗んだこともあったという。中村輝夫（李光輝）陳浩洋（聞き書き）『中村輝夫（李光輝）モロタイ島一年の記録』おりじん書房、1975年、60頁。

そして長嶋茂雄が「我が巨人軍は永久に不滅です」といって巨人軍を引退したおよそ2か月後の1974年12月に「発見」された。そのとき彼は真裸で左手で局部を押さえ、蜜刀をふりかざしてきたという。

「発見」にいたる経緯は次のようなものである。

2週間ほど前、戦没者遺骨収集団の戦友代表として同島を訪れた、川島威伸・ビルマ大使館防衛駐在官が、慰霊祭の日に島のドルバ空軍基地副官のスパルディ中尉から残留日本兵の目撃談を聞かされ、捜索を依頼していたのだ。川島は戦時中、アウンサン、ネイウインといった後にビルマの国家指導者となる青年たちを海南島に集め、密かに軍事訓練を施した人物であり、第二遊撃隊隊長としてモロタイ島で戦った、中村の直属の上官であった。

1970年代から80年代は、日本における戦友会・旧軍人団体の活動の最盛期にあたるが、それら組織の結束を促していたのが、海外の遺骨収集問題であった。この時期、軍恩連盟全国連合会などの旧軍人団体は与党と癒着を深め、軍人恩給が大幅に増えるなど、旧軍人団体は有力な圧力団体だった¹⁰。

中村「発見」の一報を受けて面会した日本大使館防衛駐在官の湯野正雄一等陸佐に対し、中村は日本語で「日本はまだ負けていません。自分は日本に帰りたい」と述べた。しかしサンフランシスコ講和条約発効を境に一方的に日本国籍を喪失した彼は、翌年、台湾に送られることになる。

晩年は中毒に近い形で飲酒と喫煙を繰り返し、結核と肝臓障害を患い、1979年6月15日、病死した。59歳だった。

その彼が、第二次世界大戦の記憶の象徴として、モロタイ島の豊かな天然資源、海洋観光資

源をアピールし日本の投資を促すため、脚光を浴びているというのだから驚きだ。島民の間ではいまだに残留日本兵の生き残りが山に潜伏しているとの話が絶えず、2012年にも捜索隊が山に入ったという。

しかし県政府や島民の期待と思惑とは異なり、彼が世間の耳目を集めたのは、40年前の時代状況が大きく関係していた。すなわち、日本が高度成長のさなかにあった1970年代が、中村輝夫、小野田寛郎、横井庄一に代表される残留日本兵にスポットライトを当てる一方、日中国交正常化にともない、日本政府が外相談話で日華平和条約を一方的に廃棄し台湾と断交したことによって、中村の晩年は犠牲にされたのである。

それにもかかわらず、中村がインドネシアで「英雄」扱いされたのには、日本人とインドネシア人が1970年代を「正」の歴史として記憶していることが影響していると推察される。

というのも、当時、対中貿易に代わるものとして東南アジア進出を目論んだ日本と、初期工業化を目指す現地の開発独裁政権は、互いに協力関係にあったからだ。

日本政府は、サンフランシスコ講和条約第14条に基づき戦争賠償を行ったが、それは現金による支払いでなく、役務、生産物供与、加工賠償という形をとった。しかも、対象国は限定されていた。というのも、中国、ソ連、北ベトナムは共産国であったことから講和条約に招待されず、米英（英領マラヤ、北ボルネオ、シンガポール）、豪は請求権放棄、個別に平和条約を結んだインド、中華民国も請求権放棄、ラオス、カンボジアは経済技術協定という準賠償の形をとった。その結果、ビルマ、フィリピン、インドネシア、南ベトナムに対してのみ賠償交渉が行われることとなったが、ビルマとインドネシアはその後個別に平和条約を締結した。日本政

¹⁰ 吉田裕（2011）『兵士たちの戦後史』岩波書店、2011年、

第4章第2節。

府が最終的に支払ったのは、各国の要求よりもはるかに少額に終わった。

日本国内では、賠償は東南アジア進出のための「投資」であるとの説明が国民に対してなされたが、それは米英に負けたとの認識はあっても、アジアに負けたとの認識が希薄であった国民感情と合致していた。

このことから対日賠償は戦時中、戦後の経済支配を連続させたプロジェクトであり、戦前・戦時中の日本人の対アジア認識を継続させるものであったといえる。

しかしそうした日本人の自己認識と東南アジアの民衆の日本像は大きく乖離していた。戦時中多くの犠牲を強いた日本と、援助・外資を梃に国家主導で「上から」の開発を行う軍事独裁政権に対する不満から、1974年1月、田中角栄首相の来訪にあわせてタイのバンコクとインドネシアのジャカルタで相次いで反日暴動が発生した。彼らは日本人を「エコノミックアニマル」と呼び、日本製の車を焼き打ちした。

そのような出来事があった年の暮れに「発見」されたのが、中村輝夫だったのである。

中村は、1942年に導入された陸軍特別志願兵制度により「日本兵」になった。

台湾で志願兵が採用されるようになったのは、朝鮮から約4年遅れの、1942年4月である。初年度は1020名の採用枠に対して、応募者は42万6000人にのぼり、競争率は実に420倍に達した。翌年度、翌々年度もほぼ同じ競争率が続き、計4524名が陸軍志願兵として採用された。彼らは半年の訓練を経て各部隊に配属された。一方で、中村ら高砂族のみからなる志願兵の第一次採用者約500名は、バターン半島の密林戦で山岳民族特有の勇戦ぶりを発揮し、軍司令官から賞詞をもらうほどの活躍をみせた。その結果、8次にわたり計約2500人の「高砂義勇隊」が南方戦

線に送られた¹¹。そしてこのなかに中村もいた。

その後1944年9月になって、台湾では徴兵制が施行され、翌年1月の徴兵検査を4万5725人が受験し、4647人が甲種合格、1万8033人が第一乙種合格となり、その大半が現役兵として入隊した。また各地に派遣されていた軍属のうち適格者は現地召集の形で二等兵として召集され、兵籍に入った。しかし米軍来攻前に敗戦を迎えたため、徴兵軍人の戦没者はわずかであった。結果的に、台湾人の従軍者は陸海軍あわせて8万433人、軍属が12万6750人で、このうち、軍人2146人、軍属2万8158人、計3万304人が戦没したとされる¹²。

一方、生き延びた者たちは、1952年に日本政府から一方的に日本国籍を奪われ「日本人」ではないとされた。しかしその一方で、戦犯として逮捕された者たちは、その後も連合国からは「日本人」として裁かれた。戦犯となった朝鮮人は148人、台湾人は173人にのぼる。

戦死も戦犯も免れ、故郷に戻った人々を待ち受けていたのは過酷な運命であった。

台湾では1947年2月28日から3月中旬にかけて、政府と台湾人との間で二・二八事件と呼ばれる衝突事件が発生した。このときの政府は、内戦に敗れ中国大陆から逃れてきた蒋介石率いる国民党が樹立した政権で、蒋介石の親友で日本留学経験をもつ知日派で、台湾接收計画の総責任者であった元福建省主席の陳儀が行政長官を務めていた。事件は、失業者が急増、食糧危機が発生し、治安悪化が深刻になるなか、ヤミ煙草の取り締まり中に起きた発砲事件を契機に、反国民政府勢力による政治暴動が起き、それがラジオ放送や新聞を通じて全島へと広がっていった。政府側は当初台湾人エリートが組織した「二二八事件処理委員会」と交渉を進める姿勢をみせたが、大陸から増援部隊が到着する

¹¹ 秦郁彦編『日本陸海軍総合事典 第二版』東京大学出版会、2005年、751頁。

¹² 前掲書、751頁。

と、台湾人に対する無差別虐殺を含む弾圧を加えた。事件の犠牲者は1万8000人から2万8000人の間と見積もられているが、数千人から10万人までとする説もある。重要なことは、このときの犠牲者の多くが台湾人の有能な知的エリートであり、事件後、台湾社会のエリート層が壊滅的打撃を受けたことである。そして事件の鎮圧を通じて、反乱を起こしそうな人間を監視する統治体制が新たに構築された。具体的には、農村での執拗な「戸口調査」と尋問調査、国民身分証の発行と検査による島内外への移動の制限が行われた。48年以降は、国共内戦の戦況を受けて戸籍管理が強化され、翌年には戒厳令が実施された。このように嚴重な住民管理体制が敷かれた台湾は、後に「監獄島」と呼ばれた。「赤狩り」に名を借りた恐怖政治である白色テロによって、1949年から60年の間に約100件の反乱グループ摘発、約2000人の処刑、約8000人に無期懲役または10年前後の刑期を言い渡した。政府は言論統制により「事件は共産党の陰謀である」と報道を意図的に操作した。そして事件の原因を日本文化の「毒素」の影響であると決めつけ、学校での日本語の使用禁止、日本書籍の閲覧禁止、日本的気風の矯正などの取り締まりを行い、「日本人化させられた台湾人」を中国人へと改造していった¹³。

台湾に戻った中村は、国民党政権が戸籍調査を実施した際に、行方不明中の自分に「李光輝」という漢族風の名をつけていたことを知る。

1970年代に入ると台湾は転換期を迎える。71年10月に国連の中国代表権を失う前後から、世界各国との国交関係がなくなり、北京政府と台湾政府の国際的地位は逆転。台湾は国際社会の孤児となってしまった。同年、米中の電撃的な和解を受け、翌年、田中角栄と周恩来が日中共同声明を発表し、日中国交正常化が実現する。

これによって、それまで台湾の中華民国を正統政府とみなしてきた日本も手のひらを返したように台湾との国交を断絶した。

北京政府との関係改善を図る日本政府にとって、中村の存在は厄介に映じた。

日本国内では、中村の日本帰国を実現させようと7つの団体が立ち上がり、銀座など街頭で署名活動が繰り返された。「中村さんを横井、小野田さんと差別するな」、「厄介払いはいひどすぎる」といったプラカードが掲げられた。

その動きは翌年に台湾人元日本兵の補償問題を考える会を生み、日本政府に戦後補償を求めたが、国会での立法化は遅々として進まず、訴訟に踏み切る。東京地裁、東京高裁で敗れるも、立法化を促す判決と世論の高まりを受けて1987年に議員立法が成立し、台湾人元日本兵の戦死者、重度の障害者一人あたり200万円の弔問金と見舞金が支給されたのであった。

このように中村の発見は、一部の人々を刺激し、台湾人元日本兵の戦後補償という流れをつくる契機となったが、彼自身は日本の地を踏むことなく、ジャカルタから台湾へと戻る。1975年1月8日のことである。

4日前に陸軍兵長に二階級特進した中村は、妻・正子（李蘭英）と32歳になった息子・李弘と再会したのも束の間、妻が20年前に再婚していたことを知り、「軍国の妻が、なぜ待てないのか」と怒りを露わにした。その後妻は長年連れ添った再婚相手の黄金木に10万円と牛、粉を払って離婚し、中村のもとに戻った。

日本政府は規定の帰還手当で3万円と未払い給与3万8000円の他に、特別見舞金200万円を贈った。さらに閣僚らのポケットマネーやカンパが数百万、日本や台湾の民間人からの援助、観光客からの差し入れなどがあり、中村は少なくとも日本円換算で1000万円をこえる金額を手

¹³ 前掲『台湾現代史』はじめに、第3・4章。

にし、「アミ族一の金持ち」になった。しかしそれが仇となってアミ族の村のなかで孤立した。暴飲暴食を繰り返し、みるみる健康を害し、末期の肺がんで死んだ。台湾に戻ってからわずか4年後の訃報であった。

中村の死を報じたのは、週刊誌では『サンデー毎日』、新聞では『サンケイ新聞』だけで、他社は共同通信の配信した小さな記事を転載しただけだった。

中村の物語は、彼が台湾人であったがゆえに、冷戦という大きな物語の犠牲となり、忘却されてしまったのである。

1975年に日本で出版された中村への聞き書きには、ジャカルタ国立病院の日本人医師が「しばらく養生して、栄養をとれば、君はまた近いうちに文明社会にもどれるから……」と中村に語った¹⁴、中村は召集令を受けて出征したが、本当は妻の分娩を理由に延期してかった¹⁵、モロタイのジャングルのなかで「台湾に帰りたい」と心底思っていた¹⁶など、国民国家の側にとって都合のよい言質が並んでいる。本人の語りといってもにわかには信じ難いが、少なくとも75年の時点で、中村がどのように受容されていたのかを物語る話である。

日本の植民地となった朝鮮や台湾では、同化政策の影響を受けて日本人以上に日本人になろうとしたり、日本兵として戦争犯罪を問われたりした人々も少なくなかった。

しかし戦争が終わるや、日本政府は彼らを日本人でないと一方的に決めて排除した。

中村輝夫という存在は、そんな戦後の日本社会に植民地責任の問題を突きつけたが、まさにそうであったがゆえに等閑視されたのである。

2. ベトナム戦争の時代

中村が非業の死を遂げた翌年、一人の難民が日本の地を踏んだ。

彼は中村と同じ台湾人残留日本兵であるだけでなく、ベトナム戦争の体験者であった。

ベトナム戦争は、「民族の世紀」と「アメリカの世紀」が衝突した、第二次世界大戦後最大規模の大戦争であった。

その経緯はこうだ。1945年の八月革命で誕生した「ベトナム民族」は、第一次インドシナ独立戦争と呼ばれる抗仏戦争によって引き裂かれた。共産中国とソ連の承認を受けたホー・チ・ミン率いるベトナム民主共和国は、ディエンビエンフーの地でフランス軍を破り、勝利する¹⁷。

このとき民族解放統一戦線組織・ベトナム独立同盟会（ベトミン）は、全土の4分の3を掌握していたが、1954年のジュネーブ協定において、大国の論理によって、一方的に北緯17度線によって南北に分断されてしまう。そして第一次インドシナ独立戦争の際に同盟国であったフランスを援助し、一時は戦費の78%を負担していたアメリカの関与がはじまる。61年、ジョン・F・ケネディ大統領は特殊戦争と称し、南ベトナム政権への軍事顧問団と援助の拡大を図る。ところがその2年後、南ベトナムの指導者ジエムが反対派によって殺害され、不安定な軍事政権が続き、サイゴン政権は崩壊の危機を迎える。65年、ジョンソン大統領は、局地戦争に転じる。北爆によって100万トンの爆弾を投下し、最大で54万の戦闘部隊を動員、化学兵器や毒薬も使用した。

米軍・サイゴン政権軍・第三国軍の総兵力は

¹⁴ 前掲『中村輝夫（李光輝）モロタイ島三一年の記録』16頁。

¹⁵ 前掲書、21頁。

¹⁶ 前掲書、53頁。

¹⁷ ちなみに中国共産党は中ソ友好同盟相互援助条約が締

結される50年以前から、ソ連側の了解の下、八路軍に入った日本兵を送るなどしてベトナムへの「国際的支援」を行っていたとされる。下斗米伸夫『アジア冷戦史』中公新書、2004年、134頁。

100万に達したが、ベトナム・ゲリラの前に苦戦し、1968年のテト攻勢でベトミンが主要都市を攻撃すると、メディアの影響もあり、米国内で反戦運動が盛り上がった。69年、ニクソン大統領は「名誉ある撤退」を決断。米軍撤退後、サイゴン軍は強化され、戦争は「ベトナム化」する。さらにサイゴン軍がベトナムの革命勢力弱体化のためカンボジアに侵攻すると、逆に革命勢力主力がカンボジアに入り、現地の革命勢力を協力して解放区を拡大。ベトナム労働党はインドシナ全域を単一の戦場とみなし行動するようになる。ホーチミン作戦によって75年4月30日にサイゴンは陥落。ベトナム、ラオス、カンボジアで共産主義政権が誕生した。

この戦争による米側の戦死者は5万8000人、戦傷者30万人にのぼり、1200億ドルの経費が投入された。超大国アメリカの敗北は、新植民地主義の限界を露呈した。以後アメリカは「ベトナム症候群」と呼ばれるトラウマを抱えることになり、他国への軍事力行使に否定的な世論が生まれた。

一方この間、日本は冷戦の恩恵を受け、原料を輸入して加工貿易する工業国として栄えていた。サイゴン陥落前後に成立した日本型工業化社会は、冷戦後に産業構造が変化したにもかかわらず、人々の社会意識を規定し、問題を先送りし続けている¹⁸。

その意味で、私たちはいまなお「長い70年代」

を生きているといっても過言ではない。

そればかりか、日米安保下での経済成長と反戦が交錯していたベトナム戦争の時代は、安保法制と平和憲法をめぐり戦後日本のナショナル・アイデンティティが揺れている現在の状況と似ている。かつて日本とアジアがもっとも遠のき断絶の時代といわれたベトナム戦争の時代状況のなかに、アジアと連帯・和解する可能性を見出すことはできないだろうか。

そのように考えたとき、思い出されたのがもう一人の台湾人日本兵・莊百洋（そう・ひゃくばん）¹⁹の存在であった。以下の記述は吉沢南の著作²⁰と1993年に放映されたドキュメンタリー番組²¹の内容に基づく。

莊は、1924年1月26日、台南州曾夫郡麻豆街港子尾²²生まれ。地元の大山脚公学校、麻豆国民学校を卒業後、父親の農業を手伝った。林家の祖先は福建省で、中農の上層の家だった。

1941年、17歳のときに知り合いの勧めもあり、同じ地方の娘と結婚。翌年、台湾総督府熱地農業技術錬成所に入り、その翌年の43年初めに長女が生まれ「富美子」と名付けた。

錬成所の養成期間が終わると、莊はただちに仏印に行くことになった。生まれたばかりの赤ん坊と妻を残して発つことは辛かったが、同時に仏印での活躍を夢見て胸を躍らせてもいた。ベトナムに渡った莊は、サイゴンの大南公司に勤務し、バクニン省イエンフォンで黄麻強制栽

¹⁸ 小熊英二編『平成史 増補新版』河出書房新社（河出ブックス）、2014年。

¹⁹ 莊百洋は日本で「林文莊」という名で知られる。これは、1983年に莊への聴き取りを行った歴史家の吉沢南がつけた仮名である。吉沢は86年に著した著書『私たちのアジアの戦争』のなかで、林を含む4人の戦争体験者の個人史を描いている。同書は聴き取りによってどこまで歴史を描けるのかという問いに挑戦した方法論の実験であり、吉沢は文献史学の成果と聞き取りの成果をそれぞれ別の作品としてまとめている。今日、オーラル・ヒストリーと呼ばれる方法を用いてアジアの戦争の記憶を鮮やかに描き出した先駆的研究という

意味において、吉沢の仕事は今後とも高く評価されるべきものである。しかし莊のライフヒストリーに限って言えば、日本占領期の箇所に力点が置かれ、残留後の生き様については詳しく描かれていない。

²⁰ 吉沢南『私たちのアジアの戦争—仏領インドシナの「日本人」—』有志舎、2010年（初版は1986年に朝日選書より発行）。

²¹ 「莊百洋さん一家」テレビ関西、1993年1月28日放送、「父は日本国籍・ベトナム貿易にかける難民」ミッドナイト、93年3月放送。

²² 現在の台南県麻豆鎮港子尾里。

培の指導に携わる。

その後、第21師団稲井連隊高橋大隊に軍属として配属され、トンで敗戦を迎えるも、ベトミンに逮捕されてしまう。1948年に解放。その後は首都ハノイから60キロ西に位置する、人口1000人ほどのラフー村で、ベトナム人妻と6人の子供と暮らす。一家は日本国籍であったことが理由で、社会主義下のベトナムで高等教育を受けることも会社で働くこともできず、農業と商いで生計を立てる他なかった。そんな生活が30年近く続いた。

この間、荘は日本への引揚げを度々試みるも「日本人ではない」との理由で拒まれ、1980年になってポート・ピープルとして、一家17人を連れて日本に入国する。

長崎県に設置された大村難民一時レセプションセンターで通訳として勤務後、姫路難民促進センターを経て、来日5年目に神戸元町の花隔商店街で「荘商行」というベトナム民芸品店を構え、さらその後、小さな貿易会社をつくり、中古オートバイや産業機械をベトナムに輸出し生計を立てた。

アジア福祉教育財団が開設した定住促進センターのある神奈川県と兵庫県はベトナム人の集住地域として知られる。神戸在住のベトナム人は、中央区に中国系、長田区を中心に日中国系が生活基盤を築き、現在に至る。中国系ベトナム人は南部出身と北部出身に分けられるが、1945年以前に台湾から渡ってきた人を祖とする台湾系ベトナム人がおり、仕事や婚姻を通じて北部出身者と関係をもっている。エスニシティ上は、荘一家はこのカテゴリーに入っていたと推測される。また、中央区には閩市を起源とする「高架下」と呼ばれる商店街があり、元町駅近郊に中古電化製品を扱う店がある。80年代中頃からベトナム人のなかに同様の仕事をはじめ

る人々が現れた。ベトナム政府がドイモイ政策をはじめると、彼らはベトナムで会社を設立し、日本とベトナムの間を飛行機で往来しながら中古品貿易を行うようになり、89年頃から92年頃に最初の最盛期を迎えた。荘一家はまさにこのブームに乗っていたことになる²³。

一方で、村に残った娘のタンは、荘の「日本人としての誇りを持ち続けるように」との言葉を13年経った時点でもよく覚えていた。彼女が村に残った理由は、すでにベトナム人男性と結婚し、6人の子宝に恵まれていたからであったが、子供が成長したら父の言葉にしたがいがい日本に渡ろうと思っていたという。

16歳で来日し、一家で日本語がもっとも堪能な四男のマンは、「お父さんにとって一番ショックだったのは、命がけで日本のために働いたのに、それ（日本国籍取得）が認められなかったこと」だと語る。

29歳のマンは、3年前に他界した父が書き残した紙片を読み返し、「日本で日本人として生きなさい」との言葉を思い出す。日本語とベトナム語、貿易の知識を活かし、2つの国営商社の貿易を仲介する仕事を営む彼は、1993年当時、日本ではベトナム国籍、ベトナムでは日本国籍のままで、日本に帰化申請をしている最中であつた。

荘が残した紙片には、皇民としての誇りを支えとして生きてきたが、日本国籍が取得できず、見捨てられた。それでも最後に日本に辿り着くことができ幸福との内容が書かれていた。

このことの意味を、私たちはどのように理解すればいいのであろうか。

おそらく荘の生は、日本がアジアの解放のために戦ったという歴史観、ベトナム共産党が国家を独立に導いたというナショナル・ヒストリー、さらには日本の高度成長を成功体験と捉え

²³ 戸田佳子『日本のベトナム人コミュニティ——一世の時

代、そして今——』暁印書館、2001年、第1部。

る物語をことごとく相対化した上で、難民問題など、現代世界が抱える諸問題に訴えかける力がある。順を追って一つずつ考察してみよう。

3. ベトナムとともに戦わなかった日本兵

今日、日本は「あの戦争」をアジア解放のために戦ったという主張が国内でしばしば聞かれる。しかし戦時中、日本政府は同盟国であるドイツ、イタリア、あるいは中立条約を締結したソ連への配慮から、アジア解放という戦争目的を公に掲げることはなかった。そもそも日本は同じアジアの朝鮮・台湾を植民地支配し、中国と戦争を行っていたのであり、先の大戦を人種戦争と評価するのには無理がある。

なかでもベトナムで日本はフランスと協力関係にあった。当時、ベトナムのフランス政府は、ナチスドイツに協力的なヴィシー政権であった。日本は1940年8月に同政権との協定を締結し、共同でインドシナ半島を支配することを約したのである。その前提の上で、日本は翌月に北部、翌年7月に南部に軍を進駐させ、影響力を拡大していった。

日仏の二重支配は、1945年3月9日に日本軍が仏印処理と呼ばれる武力行使に踏み切るまで続いた。日本は主食の米栽培から換金作物への転換を強制し、戦争末期には大飢饉が発生し、大量の餓死者が出た。

戦後、フランスでレジスタンス出身のドゴール政権が誕生すると、日仏協力の過去を清算し、再植民地化を図るため、対日協力者は徹底的に糾弾された。しかしフランスが裁いたのは主としてフランス人への罪であり、再植民地化の障

害であるベトナムへの罪は不問にされた。

1946年、親仏政権とベトナムとの間で本格的な戦争が始まった。フランス軍はアフリカからも兵士を送り67万を動員したが、54年のディエンビエンフーの敗戦が決定打となり、ベトナムが勝利した。それは東南アジアの植民地体制の崩壊を象徴する出来事であった。

このとき、インドシナ半島に残留した日本兵700～800名のなかから、推定600名がベトナムとともに戦った。その半数が戦病死し、生き残った者たちも軍事境界線の北側にいた者は1954年から61年の間に強制送還という形で日本に帰国していった²⁴。

独立戦争初期に中部の第5軍区にいた日本人は、グエン・ソン将軍から「新ベトナム人」と呼称された。一方、南部メコンデルタの第七戦区では1950年代初頭まで「平和戦士」（チェンシー・ホアビン）と呼ばれた。2005年、ベトナム政府は残留元日本兵40名近くに叙勲を行った²⁵。

日本兵に対して理解のあったグエン・ソン将軍が1946年6月に設立したのがベトナム初の本格的な士官学校・クァンガイ陸軍中学である。教官8人はいずれも日本人が務め、軍事知識と技術を伝授した。

その一人、加茂徳治は、ともに残留した4人の日本兵とともにベトナム名「ファン・フエ」を名乗り、1947年まで教育に携わった。その後、生徒300名を率いて戦闘を行った。52年に人民総司令部政治総局から出頭を命じられ、「学習」の名の下、体よく帰国を迫られ、その年のうちに中国経由で舞鶴に戻った。

このように残留日本兵は、独立戦争の初期にかけて、軍学校での教育、戦闘指導、技術・経

²⁴ 一方、南ベトナムにいた残留日本兵は、1960年代半ばに日本工営が日本の戦時賠償によって建設したダニム川のダム建設現場で働くなどした。ベトナム戦争を取材に訪れた開高健は、そこで沖縄出身の当間ら残留日本兵に出会い、彼らが南ベトナムに残ったのは、戦前

日本で共産主義は絶対悪との教育を受けていたことが原因であると書いている。開高健『ベトナム戦記』朝日文庫、1990年、150頁。

²⁵ 井川一久「日越関係発展の方途を探る研究」東京財団研究報告書、2006年。

済面で貢献した。しかしベトミン側が日本人の知識と技術を習得すると、共産主義に理解を示さない残留日本兵たちの存在はむしろ重荷にすらなった。その結果、1952年までの間に退役勧告を受けて残留日本兵の多くが除隊し、ディエンビエンフーの決戦に参加した者はほとんどいなかった。

ベトミンに参加した日本兵は、初期に活躍し、後期に厄介者扱いされた。しかしベトミンに加わらなかった荘は、貢献することがなかった分、追われることもなかった。以下の荘に関する記述は吉沢の著作²⁶に基づく。

置き去りに近い形でベトナムに残留した荘は、田舎町で間借りした家の娘と結婚し、1949年に長女、50年に長男、52年には次女が生まれた。戦火が激しくなった53年、フランス軍の爆撃を受け、「フランス憎し」の感情が芽生え、ベトミンに共鳴するが、軍隊には入らなかった。

1954年、ヴェトバック地方のタイグエンでベトナム政府の肝いりで「日本人」会議が開催されると、荘ら3人の台湾人も参加を希望した。荘は家族に別れを告げ、荷物をまとめ集結地に急いだ。間に合わなかった。しかし、他の2人の台湾人も「日本人ではない」との理由で、引揚げを拒否され、ベトナムに残る羽目になった。荘は仕方なくタイントゥに戻り、農業をはじめた。

1959年、ベトナム政府は、なお残留する「日本人」の「学習会」を開き、これに参加した40数名の「日本人」のうち、20数名が日本に引揚げることになる。しかしまたしても荘ら3人の

台湾人は引揚げを拒否されてしまう。こうして再びタイントゥに戻った荘は、村社会のなかでの立場も微妙なものとなり、1956年、ベトナム政府の指導で、中国籍取得を在ハノイ中華人民共和国大使館に申請した。日本政府が帰国を拒否し、台湾政府と国交がない以上、ベトナム政府としては、中国籍の取得以外に手がなかった。しかし、中国大使館からは何らの回答も得られず、荘は、「無国籍者」として、ベトナム戦争下の10年を生きることになる²⁷。

ベトミンとともに戦わなかった荘は、台湾人であったがゆえに、乞われることも、追われることもなく、ベトナムの人々と新たな戦争を体験することになったのである。

4. ベトナム戦争を知る男

戦後日本は1955年を境に政治の季節から経済の季節を迎える。

だが日本経済は常に右肩上がりだったわけではない。高度経済成長期とは、好況と不況の繰り返しに一喜一憂しながらも、人々は必ず好況がやってくと信じ、全体として高い経済成長率を保っていた時代であった。

たとえば朝鮮特需が減少した際、日本経済は一時的に失速し、対中貿易拡大への期待が膨らんだ時期があった。

このときオリンピック不況に陥った日本を再生し、高度成長への道を開いたのが、合計60億ドルにのぼるベトナム特需であった。

トーマス・ハイブンは著書『海の向こうの火

²⁶ 前掲『私たちの中のアジアの戦争』。

²⁷ 残留日本兵のなかには敗戦直後に中国籍の取得に成功した者もいる。落合茂兵衛は、敗戦後、雲南軍、ベトミン軍と渡り歩いた後、1946年11月に中国国籍を取得。53年に日本国籍とベトナムの永住権を取得するまでの間、「中国人」として過ごした。彼が中国籍を取得できたのは、戦時中に日本の国策会社「昭和通商」に勤めていた旧知の中国人のお蔭であった。落合はサ

イゴン陥落時、東京銀行サイゴン支店の現地社員で、77年に日本に帰国するも、93年に再度ベトナムに戻り、2008年、88歳で生涯を閉じるまで、元日本兵とその家族を中心に組織された「寿会」の世話役をつとめるなど、在留日本人社会の中心にいた。牧久『サイゴンの火焰樹—もうひとつのベトナム戦争—』ウェッジ、2009年、第2部第2章。

事』のなかで、日本は「財布と良心を満たした」と評したが、その言葉の通り、「トイレットペーパーからミサイルまで」日本は米軍に提供した。ナパーム弾の9割は日本製であり、有刺鉄線、防虫網、兵舎用プレハブ、土嚢、木材、セメント、発電機、ダイナマイト、クレーン、ジープ、トラック、カメラ、軍服、靴、食糧、宣伝ビラ、遺体袋など、あらゆるものが日本でつくられ、戦地に送られた。米軍負傷兵の75%が治療を受けたのも日本だ。

その一方で、ベトナム戦争に疑問を抱いた一部の市民が、反戦運動を展開した。軍需品輸送拒否、戦車輸送妨害、射撃演習阻止、野戦病院開設反対、米空母入港抗議、衣料品寄贈、反戦フォーク集会などが行われた。

北爆直後に哲学者の鶴見俊輔、高畠通敏（政治学者）小田実（作家）²⁸ら戦争体験者の年長の文化人が主になって結成された「ベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）」は、戦争の記憶を共通の軸にベトナム戦争阻止を掲げた。規約、綱領、会員登録は一切なし。市民各自が自発的に参加・脱退できる「個人原理」を売りに、穏健で思想色のない平和団体として、定例デモと集会を行った。小田のカリスマ性と吉川勇一の実務能力により、若者の支持を広げていったが、定例デモの参加者が50人になるなど、活動はやがて停滞する。

ところが、ベ平連が1966年6月の米大使館前座り込み、8月の日米市民会議で日本政府と安保条約を批判し、小田が被害者と加害者の重層性を強調したことで転機が訪れる。さらに佐藤栄作首相の南ベトナム訪問阻止のため、三派（中核派、社学同、社青同解放派）全学連が羽田空港に突入を図り、ゲバ棒、覆面、ヘルメットで機動隊に勝利した第一次羽田闘争によって、若者たちの叛乱に火がつこうとしていた頃に、脱

走兵援助活動を公表したことで、若者のエネルギーを吸収し、定例デモの参加者は過去最高の2000人を記録。ベ平連には学生が大量流入し、組織は一気に急進化していく。68年の国際会議は、古参の年長者と新参の若者の対立の場となり、組織は戦争体験をもつ文化人中心の平和団体から非暴力だが社会改革志向をもつ学生の集団に変貌した。

若者たちは、なぜベ平連に参加したのか。

彼らは、幼少期に敗戦直後の途上国型の社会、青年期に高度成長を経た先進国型の社会と、「一身にして二世を生きた世代」であった。民主教育を受けて育った彼らは、ベトナム特需で繁栄する日本社会と、受験戦争を勝ち抜いて大学に入った自分を、同じ「加害者」としてみる傾向があった。1960年には59%だった高校進学率は69年には80%をこえるまでに急上昇していた。60年代に中高生だった「団塊の世代」は、「国民皆受験」の事態にはじめて直面した世代であり、受験戦争で級友を蹴落として大学に進学しエリートコースを歩んだ者たちは、一種の罪悪感を抱えていた。くわえて、彼らの一部には、自分自身が徴兵されベトナムに送られるのではないかとの危機感もあった。

その背景にあったのは、戦争・飢餓・貧困といった途上国型の「近代的不幸」ではなく、アイデンティティの不安・リアリティの希薄化・生の実感の喪失という先進国型の「現代的不幸」をいかに克服するかという言語化できない葛藤であり、セクトに入り学生運動に身を投じた若者と、ベ平連に入った若者は、紙一重で存在していた²⁹。

しかし、大多数の日本人にとってベトナム戦争は「対岸の火事」に過ぎなかった。日米貿易摩擦回避と小笠原・沖縄返還実現を優先する日本政府は、一貫して米を支持した。

²⁸ 大阪大空襲を生き延びた経験をもつ。

²⁹ 小熊英二『1968』上下巻、新曜社、2009年。

その結果、苦悩したのは沖縄の人々である。第二次世界大戦中、地上戦の「被害者」となった彼らは、全県の13%を占める米軍基地がベトナム戦争の出撃基地、後方支援基地となったことで、戦争の「加害者」となった。

ベトナム戦争は最終的には北ベトナムの勝利で終わるが、勝者であるベトナム人の戦死傷者は計300万人、民間人犠牲者400万人、行方不明者30万人、枯葉剤被害者100万人、精神疾患600万人、難民1000万人にのぼるともいわれる。

2013年8月には、ベトナム戦争の最中に米軍の爆撃を逃れ、実に40年間にわたり社会と隔絶し、ジャングルに身を隠していた親子が「発見」され、世間を驚かせた³⁰。

これほどの犠牲の上に、日本の高度成長は達成されたのである。アメリカは、ベトナムの戦場に韓国、台湾、フィリピン、タイの兵士を連れてくることで、アジア人からなる国際軍を形成し、アメリカ対アジアという図式を覆い隠そうとした。なかでも精鋭部隊計31万2853人を派兵³¹した朴正熙の韓国は、その見返りに「漢江の奇跡」と呼ばれる復興を遂げた。1965年の日韓条約締結は、韓国兵の大量派兵を支えるものでもあった。また同年にインドネシアで9・30事件が発生すると、親米的なスハルト政権の成立を経済的に助けた。

しかしそのことに無自覚なまま、日本は経済大国としておごるようになり、いつしか経済成長それ自体を目的に成長の神話を追いかけるようになった。1970年代中葉に日本人の嫌韓感情と親米感情が高まったのは、大国意識の反映に他ならなかった。

過酷なベトナム戦争の当事者となった荘の人

生に転機兆しが訪れたのは、1973年のことである。この年、ようやく台湾と連絡がつき、日本時代の戸籍の写しを入手し、「日本人」として国籍を再申請したが無駄だった。75年にはベトナム戦争も終わり、翌年、ハノイに日本大使館が開かれる。荘は毎月のように大使館に手紙を書いたが、返事はなかった。そうこうするうちに、78年に中国軍がベトナムに侵攻し、荘は家族とともにベトナムを出た。妻、子供夫妻9人、孫5人の総勢15人を引き連れてハイフォンを出港し、14か月香港に滞在した後、1980年に日本に到着した。ベトナムの出国証明書しかもたない荘を、日本政府は「難民」として受け入れたのである。

荘は、「日本人」として台湾にやってきて、自他ともに「日本人」として振る舞っていたにもかかわらず、1954年に残留日本人とともに引揚げることができなかった。このことは、54年の帰還が、あくまで戦後日本とベトナムの政府間関係によるものであり、そこには人道上の配慮のない、極めて冷徹な政治力学が働いていたことを窺わせる。もっとも、54年と59年に開かれた「日本人」会議に台湾人が参加できていることからして、ベトナム政府は基本的に本人の意志を尊重し、「日本人」として扱っていたと思われる。むしろ日本政府の方が、彼らを「日本人」とはみなさず、無視したといえよう³²。

5. 難民

ベトナム戦争の終結を受け、1975年に国連総会で「インドシナ難民」に対する人道的援護を求める決議がなされた。これを受け、ベトナム、

³⁰ 「ベトナム戦争から40年、父子生還 米軍の爆撃逃れ ジャングル生活」スポーツ報知、2013年8月11日配信。

³¹ その過程で韓国軍によりベトナム人5000人余が虐殺されたが、戦後経済関係を優先したベトナム政府は「過去にフタをして未来へ向かおう」とのスローガンを掲げ、戦争被害の賠償を求めず、地方の記憶も統制。韓

国内でも虐殺事件をめぐる記憶の闘争が起きた結果、負の歴史は国民の間で共有されていない状況が続いている。伊藤正子『戦争記憶の政治学—韓国軍によるベトナム人戦時虐殺問題と和解への道—』平凡社、2013年。

³² 前掲『残留日本兵』119-121頁。

ラオス、カンボジアからの難民は、難民条約による難民認定審査を受けなくても全て難民とみなされた。

そもそも難民とは、1954年の難民条約によれば、迫害を受けそうであるという事実関係、恐怖感を抱いているという心理状態に置かれた人々のことを指していた。それが74年のアフリカ難民条約によって解釈が広げられ、内乱、内戦、外国の支配・占領、重大な政治的混乱を理由として本国を逃れた人々のことも指すようになった。

いわばその延長線上に、インドシナ難民はあるわけだが、国連決議の背景には、人道的配慮の他に、反共宣伝への国際世論形成を目論む米国の思惑もあった。

ベトナム難民は1975年から92年の間に160万人に達した。生命の危機に瀕して亡命してきた「ボート・ピープル」は79年にピークに達し、87年からはかわって出稼ぎ目的の「経済難民」が増加した。

「ボート・ピープル」の受け入れは、東南アジア諸国、日本にとって初めての「難民」経験であった。日本が難民条約に加入するのは1981年のことであったが、78年の時点で人道的見地から閣議了解という形でベトナム難民の定住認定がなされた。しかし、難民の多くは米国ら第三国への定住を希望した。生命の危機に面したベトナム難民は定住先に日本を選ばず、その後やってきた経済難民は豊かな日本を目指したのである。

その意味で、ボート・ピープルとして日本にやってきた荘が定住先を日本に選んだのは、インドシナ難民の行動としてみると稀な事例であるが、台湾出身の日本兵という彼がこだわってきたアイデンティティからみると、腑に落ちる。

末っ子の荘映雪によれば、父親は寡黙で、日本国籍が取れなくても投げやりになることはなかったという。しかし母親のクワット・ティ・

チュンが父の思いを代弁するように愚痴を漏らしていたのを聞き、「ベトナムに行かされた。でも結局帰してもらえず、やっと戻れたと思ったら、今度は日本人として扱ってもらえない。悔しさやもどかしさが混じっていたのではないか」と想像する。以下は、2015年8月19日に大阪で筆者が映雪夫妻に行った聴取りに基づく。

5歳で来日した映雪は、幼心に飛行機で大阪の空港に降り立ったことや大村のさとうきび畑で遊んでいたことを覚えている。長崎、姫路時代の父親は、「スーツを着て立派な感じ」だったという。後に家族たちから聞いたところによると、ラフー村での一家はベトナム政府の公安当局から「スパイ扱い」されて厳しい監視にあっていたという。原因は父・百洋が日本国籍であったことで、自分で商売をすることも禁じられていたため、魚を獲るぐらいしかできず、一家の暮らしは母・チュンが営む染料業で支えられていた。幸い、チュンには商才があった。しかし少しでも暮らし向きが豊かになると、すぐに公安が来て、口実をつけては金などの高価なものをもっていった。したがって日本行は家族全員にとって喜ばしいことであった。

「私にとって父は日本人という感覚でした」と語る映雪は、小学校時代の大半を姫路で過ごした。難民センターから登校し、クラスメイトは日本人ばかりの環境のなかでも、外国人だという「負い目」を感じたことはなく、「半分は日本人、半分はベトナム人」との認識だった。幼い頃、百洋は映雪をおんぶしては、「赤とんぼ」などの日本の歌を聞かせてくれた。ときに軍歌を口ずさむこともあった。チュンは、日本語はできなかったが、靴の製造工場で労働者として働きながら、子育てに勤しんでいたという。

一家の暮らしが軌道に乗り出したのは、神戸元町駅の高架下で中古自転車・バイク・車の販売を手掛けるようになってからで、百洋は、在日ベトナム人社会のなかで、こうした商売をし

た先駆けだったという。

百洋が亡くなったのは、ビジネスが一番上手くいき、息子たちに引き継ごうかという矢先の1986年。日本で葬儀を済ませた後、お骨を台湾に送り、墓を建てた。実は台湾出生時に別れた台湾人妻とその娘とは、一家が姫路にいた頃に訪ねてきて以来、交流があり、それは孫、ひ孫の代になった今日も続いている。「台湾の家族も大切にしてほしい」との百洋の願いは叶えられたのである。

百洋の死は「兄弟のなかで一番日本人化していた」映雪をベトナムに向かわせた。というのも、百洋がいなくなったことで、ベトナム語しか話せない母親とのコミュニケーションに支障が生じるようになったからだ。映雪は、このときベトナム留学中であった現在の夫である山上巧と出会った。

阪神大震災で四男マンの家が全焼すると、映雪は一階の一角で三女映紅とともにベトナム料理店を営んだが、三女の結婚を機に店をたたんだ。その後、山上とともに大阪で14年にわたりベトナム料理店を営んでいる。

62年の生涯のうち、半分以上の36年間をベトナムで過ごし、晩年は日本で暮らしながら、死後、台湾の地に眠る莊百洋。台湾に残してきた家族と、ベトナムから連れてきた家族、それにベトナムに残った家族は、孫30人、ひ孫20人にのぼる。彼らが、活発に交流する様は、百洋の波乱万丈の人生を投影しているように映じる。

おわりに

以上、本章で扱った中村、莊の人生を翻弄したのは、中国と台湾、北ベトナムと南ベトナムという冷戦によって生じた分断国家の存在であ

った。ベトナム戦争を経て、インドシナ半島に誕生した共産主義政権は、文化大革命を転機として、中国からの「自主独立」へと向かっていった。

アジアでの冷戦とは一体、何であったのか。

20世紀は、帝国主義、脱植民地主義、社会主義の名の下に数多くの戦争が繰り返された時代であった。残留日本兵の存在意義とは、そうした自主独立の栄光の物語を相対化する点にあった。彼らの生と死は、いかなる大義名分や理由があろうとも、戦争とは過酷で残酷な人間性の発露であることを示している。

脱植民地化の動きはベトナム戦争で最高潮に達し、残留「日本兵」の歴史的役割は終わりを迎えた。しかし、その後に起きた社会主義国家同士の対立のなかで、新たな残留兵が生み出された。たとえば「もう一つのベトナム戦争」との異名もとる、1979年にはじまったソ連によるアフガニスタン侵攻で派兵され、翌年に行方不明となったウズベキスタン出身の旧ソ連兵バフレドティン・ハキモフの生存が、2013年、アフガニスタン西部で33年ぶりに確認されている³³。

この他にも、朝鮮戦争に参加した「在日学徒義勇兵」、国共内戦のさなかに発生した「流亡四川兵士」、台湾の「白団」など、グローバル冷戦は数多くの残留兵を生み出している。

そうした残留兵の存在を通じてアジアの多様な戦争と開発の記憶を明らかにしていくことを筆者の今後の課題としたい。

追記

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金(若手研究B)「残留日本兵の社会史的研究」の成果の一部である。

³³ 「アフガンで行方不明の旧ソ連兵士、33年ぶりに生存

を確認」CNN、2013年3月7日配信。